



「カセギとツトメ」

今から5年前、私は友人を訪ねてモンゴルを旅した。そこはロシアとカザフスタンとの国境にある小さな田舎町だ。遊牧民生活を送る友人に会うため、市場で買い出しをしていた時、1人の少年が荷物を運ばせてくれと話し掛けてきた。この辺りにはよくある子どものアルバイトだ。残念なことに、通訳と私の二人旅なので大きな荷物はない。代わりに話を聞かせてほしいというと、少年は不思議そうな顔をしながらも了承した。

彼は13歳で、5人家族の長男という。学校が終わると、この市場でお金を稼いでその収入を家族の生活費の足しにするらしい。たまにチップを弾んでもらい、好きなものを購入するのが楽しみという。子どもに話し掛ける妙な外国人と通訳の3人は市場の真ん中に座り、話し込んだ。

最後に、こんな質問をした。「大人になったら何になりたい?」。すると彼は少し考えて「警察官」と答えた。理由を聞くと、この辺りではいまだに交通マナーが悪い場所も多く、交通事故が絶えないと。そのためにアルバイト仲間が事故でけがをする事もあり、そんな怖い思いをする子どもと事故を無くすため、警察官になりたいというのだ。

私が面接官なら満点をあげたい気持ちになった。同時に、比較的豊かといえるわが国はどうだろうとも思った。自分がいかに損をせずに効率的に生活するかのみを手掛かりに生きてはいないだろうか。

仕事はカセギとツトメに要素分解できていると思っている。生きる上で両方とも大切な要素だが、カセギばかりに目がいってしまい、「自己肯定感」を育むツトメがおろそかになってはいないか。そこに誇りはあるのか。そう自問自答しながら、私は彼と別れた。家族を支える少年の後ろ姿は、たくましく輝いて見えた。

たかみ・だいすけ 日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。39歳。